

ある自閉的精神障害児の追跡観察と行動分析

中 村 章 人

精神障害児を対象とする心理診断の場面においては、生育歴、日常生活における行動状況、心理学的検査・測定、および行動観察などから、彼の障害が現在どのような症状を示しているのか、そしてそれが起因するところは何か、などについて診断していく。しかしながら、現実の診断過程においては、数多くの問題に直面するのが常である。

とくに児童相談所等における就学前幼児を対象とする診断過程においては、知能発達遅滞の症状を呈し、その上ひっ込み思案、多動性、拒否的傾向、自閉的傾向、分裂症的傾向などの症状を示す例がかなり見られ、このような場合、一義的または即時的に診断を下すことは困難であって、かなり長期にわたっての多角的検討を必要とする。また診断に際しては、ラポールを得るためにかなりの時間努力したとしても、いわゆる質問による心理学的テストは十分施行することはできず、このような場合、現症状の診断にとって直接手がかりとなるのは、幼児を比較的自由な場面においたときの行動観察が主とならざるを得ない。この不足を補うために、診断・治療過程においては、ある程度あらかじめ決めた行動カテゴリーに従って観察をする必要があろう。しかし、自由遊戯場面における行動は、いわば小集団実験におけるような統制された場面設定ではないので、あまり微視的な観察はできず、ある程度巨視的なカテゴリーによる観察とならざるを得ないし、また微視的な観察が必ずしも観察・治療場面に有効であるとはいえない。

本稿においては、知能発達遅滞とともに自閉的傾向をもつ一人の精神障害児の行動特性を追跡観察して行動を分析し、さらに本児と同様の症状を示す幼児の診断上の問題を提起していこうとする。その際、とくに本児についての不安傾向、関心と自発性、対人交流、言語機能、知覚・記憶・思考機能、運動機能の各行動特性について問題にする。

症 例

S. K. (男, 1967年11月26日生)は精神的発達の遅れという問題をもって、初めて長野県松本児童相談所を訪れた。当時4歳4ヶ月であった。当初、精神科医による診断は「精神薄弱」であった。その後1年余の間に相談所において3回、引き続いて約9ヶ月間に信州大学人文学部心理学研究室において21回の観察と両親に対する助言指導が筆者によって行なわれた。この一連の観察指導が終了した時点における他の精神科医による診断は「自閉症」であった。

家族環境と生育歴

(1) 家族：父、母、兄(中3)、姉(中1)、兄(小5)(1973年6月現在)。家系に精神障害者はみあたらない。兄姉はいずれも学校の成績は上位。父母ともに社会性、性格等にとくに問題はない。家の職業は商業。

(2) 生育歴：母親の妊娠中に病気はないが、胎児は逆位で、出産日の前日まで数度の矯正が行なわれ、出産は予定より20日早かった。出産は正常。体重は3000g。生後、本児は比較的健康で、長期の発熱をとまなり病気はなかった。乳の吸い方は弱く、泣き声も弱かった。比較的小となしく、放っておいてもだまって寝ていることが多かった。初歩は1歳8ヶ月頃であったが、上の兄も1歳6ヶ月頃でおそかった。生歯は1歳2ヶ月頃、始語は2歳頃で、「ママ」と言うことがよくあったが、それ以後はほとんどことばを覚えることはなく、わけの判らない叫び声をあげることが多かった。童謡を熱心に教えたところかなり歌うようになった。おもちゃに対する興味を示さず静かにしていることが多かった。はしは使用できず、あきらめてスプーンに変えてしまった。保育園入園前には全くことばを言わなくなってしまった。この頃から家ではしかることが多くなった。保育園入園当時は登園をいやがりよく泣いた。歌はときどき歌う。

相談所における観察

1972年5月7日より1973年6月7日までの間に筆者が担当した3回の観察指導の概要について述べる。

第1回 1972年5月7日

相談者の問いかけに対しては全く応じる様子はなく、不安そうな顔をして部屋の天井を眺めることが多い。遊戯室ではやはり周囲を眺め廻すが目の焦点は定まらない。おもちゃを手渡しても、ちょっと目をやるだけで関心を示さず受けとろうとしない。動くおもちゃの汽車を足でける。約15分間一言も発しない。

母親からの聴取：家では話しかけると「うるさい」「いやだ」と言うこともある。一時大便を教えることがなくなったことがある。食事は自分で可能である。衣服の着脱には補助が必要。靴は自分ではく。

対人的交流や外部のものに対する関心は示さないが、渡そうとするものには目をやり一応外部のものと対応している。不安傾向もかなりみられる。

第2回 7月10日

遊戯室に入るとき最初は入室を拒んだが、しばらくたって水道があることに気づき自分から近づいて行く。砂場でスコップを手にして砂を盛る。他のおもちゃには関心を示さず、母親がミニカーを渡そうとすると近づいて行く。筆者が近づいても目を向けず、目の焦点が定まらない。約20分間全く声を発しない。何をしても常に部屋を眺め廻して表情をゆがめ、不安そうな様子がみられる。

第3回 1973年6月7日

問いかけに対して全くまれではあるが「うん」というような受け答えをすることもあるが、大部分は問いと同じことを反復する反響言語である。次にやることを促がさない限り一定行動をとり続ける。「向うへ行く？」と聞くと、一緒についてきて「むこうへいく？」と言う。時々部屋を見廻して不安そうな様子を示すが以前ほどではない。家では相変らずおもちゃに対する関心はないが、三輪車に乗るようになったという。用便は親が促がすと自分でする。保育園では先生や友だちとかなり交流するようになってきたという。

相談所における3回の観察結果から本児の行動特性をみると、1) 常にかかなり強い不安傾向を示し、2) 環境(人、物)からの情報の受容と環境に対するはたらきかけが少なく(自閉的傾向)3) ものごとに対する関心や自発的行動がほとんどない。また知的機能においても、4) 発することばが少なく理解力はない。5) 刺激に対する弁別力や思考力もわずかである。6) 生活習慣は一部は確立している。このような症状も回ごとに異なる。第1回と第

2回では(約2ヶ月間)症状はほとんど変化していないが第3回の症状をみると、前2回と比較して(この間約11ヶ月)かなりの変化がみられた。1) 不安傾向は減少し、2) 反響言語ではあるが、ことばをかなり発するようになり、3) 用便の習慣もついてきている。しかし、4) 対人交流と外界のものごとに対する関心は前の2回の内容と同程度に留まっている。

当研究室における観察

本児の相談所における観察を通して、不安傾向、自閉的傾向、および知的発達遅滞のあることが明らかになってきた。とくに注目しなければならないのは、著しい一般的不安傾向を示すことである。一般に、人間が強い恐怖や不安状態にあるときには、知的機能や環境との交流は十分に行なわれず、精神機能全体のはたらきがぶくなくなると考えられる。このような観点から、当研究室における観察・指導を行なうに当っては、知的機能の増大よりもまず不安傾向を減少させることに留意した。そして不安傾向を解消させる一つの方法として、できるだけ多くの環境場面において対人的接触をもたせるように配慮し、身体的運動を通して心的緊張を解消させるようにした。

方法：週に一回または二週に一回来室してもらい、室内外の対人場面で自由に遊ばせて本児の行動を詳細に観察した。そして父親または母親から家庭における本児の様子を聴取し、これと観察の結果をもとに、以後の家庭における接触態度について助言をしていく方法をとった。行動観察場面においては、とくに統制された条件を設定したり、特定の方法に基づいて治療を行なうという方法ではなく、心理学専攻生の一名または二名が本児の遊び相手(遊戯者)となって、ごく自然の遊びを行なう中で、主として筆者がその遊び場面を観察して本児の行動を記録する、という方法を採用した。遊びは行動実験室、および遊園地や学内などの屋外で行なった。実験室における行動観察は、室内に備えつけてあるテレビカメラを隣室で操作して、隣室にあるモニターテレビにその画像を写し、それをカメラとビデオレコーダーによって記録するという方法をとった。また音声は、実験室に備えたマイクを通してビデオレコーダーまたはテープレコーダーに記録した。屋外においては行動を写真にとって記録し、その都度遊びの様子を筆記して記録した。1回の遊びは約1時間とした。次に観察結果のあらましを述べるが、本児の症状が前回とあまり変化していない場合には、その回の詳しい内容記述は省略した。本児の発したことばのうち?印は質問口調を示すばあいもあるが、大部分は語尾の調子が高く上がること示した。また本児の発言を ch で示し、遊戯者の発言には氏名の頭文字を示した。

観察者：中村 (N)、観察補助者

観察補助者・遊戯者：津崎 (Ts)、高田 (Ta)、近藤 (K)、古市 (F)、間宮 (M)、高橋 (Tk)

第1回 1973年6月14日(遊戯者：K, F)

初回のため遊戯者との接触や場所に慣れるよう配慮する。屋上へ上がる階段のところで急にこわがる。母親が励ますと、ch「よいしょ、よいしょ」と言いながら自分で上がる。屋上へ出るとじっとしたまま動こうとしない。表情は非常にかたい。抱き上げて景色を見せると、ch「あぶない?」「かえる?」と言う。階段を降りるときは、やや恐怖心があるようであるが、一人で降りる。エレベーターに乗るのはいやがる。N「こんにちわ」と言うと ch「こんにちわ」と普通に答える。反響言語が多い。一旦椅子に腰かけると椅子から離れようとする。部屋の中をよく見廻す。窓から外を見てもどこを見ているのか焦点が定まらない。遊戯者が数を「イチ、ニー、サン」と言うと一緒にいうが、数概念としては把握されていないようである。おもちゃの電話を出して、F「もしもし」ch「もしもし」と言うがすぐ横

を向いてしまう。おもちゃには関心がない。時々意味のない笑みをする。場面全体を通して不安傾向はさほど強くない。相談所における第3回の状態とほぼ同じである。

第2回 6月21日 (Ts, F)

最初からかなり強い不安傾向を示した。N「すわっていいよ」悲しそうな声で、ch「すわっていい?」「おっかい?」……。N「自動車に乗ってきたの?」ch「のってきたよ、のってきた?のってきた?」と尻上がりに強く叫ぶ。おもちゃのピストルを向けて、Ts「バンバン」ch「おっかない?」「だいじょうぶ?」……。F「お外へ出ようか」ch「でる?でたい?でたいよ」……。クレヨン箱を箱に入れてふたをする。F「片づけて外へ行こう」ch「そとへいきたい?いきたい?いこう」……。階段をなかなか降りようとしなない。手をつないでやると降りる。Tsが紙飛行機を作って「飛行機だよ、おいで」と言う。悲しそうな声で、ch「やだ?やだ?」F「おいで」ch「だいじょうぶ?」……。時々わけの判らない叫びをあげる。chがクレヨンで何か画いていると急に、ch「うるせなに?なに?なに?」と叫ぶ。F「お外見よう」と言うと、ch「こっちへおいで」と言いながら窓の所へ行く。帰るとき、N「さ帰ろう」と言うと、ch「かえる」「ちゃんちえさようなら」と普通に言う。

いままでに見られない症状を示した。反響言語や拒否の言語があり、音声の調子が尻上がりに高くなる。しかも恐怖を示すかのような叫びと不安傾向を伴うことが多い。ことばを通しての対人交流は以前より多く見られた。

第3回 6月28日 (Ts, K)

母親が退室すると、ch「いやだ!いやだ!」と大声で泣き叫ぶ。ch「おしっこ」と言うので母親を呼ぶと、急ににっこりして便所へはねながらかけて行く。K「雨雨降れ降れ母さんが……」と歌うと楽しそうに一緒に歌う。音程は比較的正しい。窓の外を見ていると雨が降り出し、ch「あめふってきた」と言う。「おじちゃんたち」をよく言うが意味は判らない。紙風船をふくらまして渡しても目を向けないで、両手でつぶしてしまう。室外から電話の音が聞こえると、ch「でんわ!」と言う。机の上からクレヨンを落すと自分で拾う。前回と同様の叫びがあり時々意味もなく笑うこともある。電気スタンドの電気をつけることに関心があり、ch「でんきつける」「でんきけす」と何度も言う。屋上では前より不安を示さず「おる」と言うだけ。

最初の段階を除き情緒的に安定している。やはり反響語があった。外界のことに関わり反応を示す、対人交流も今までになく多くみられた。母親を追うというような行動は注目に値する。

第4回 7月10日 (Ts, K)

内容省略。反響言語や叫びはほとんどない。比較的小となしく遊戯者に対応し、積木もよく積む。出てくることばは場面と対応するものが多い。前回よりも自発性が多くよくしゃべる。

第5回 7月19日 (Ta, M, K)

最初は語りかけてもあまり返事がない。K「きょうは誰と来たの?」ch「きたよ、おかあちゃんきたよ」(実際は父親と来た)。窓から離れた椅子に腰かけているが、やがて立ち上って、ch「がっこ?」K「うん、あれ学校だよ、ほかに何が見える?」ch「みえるよ」……。突然、ch「はいくえん?」K「保育園?」ch「はいくえんよ」K「保育園で遊んだ?」ch「あそんだよ」K「保育園はどこ?」ch「はいくえんはどこ?」M「ブランコある?」ch「ブランコあるよ」……。粘土をこねながら、ch「おじちゃんたち」と言い、急に、ch「S(本児の名)くん、おっかい」M「おっかないよ」ch「おっかない?いく?いやよ」など言う。ピストルを向けても以前のようにこわがらない。M「おしっこ行く?」ch「いやよ」……。階段は以前よりこわがらずに降りる。股間に手をやって跳ねる。

叫び声はなく、反響語も少なくなっている。情緒的には次第に安定して来っており、不安傾向はほとんど示さない。前回と同様よくしゃべる。

第6回 8月2日 (K, M)

M「さあすわろう」ch「おじちゃんすわる?がっこ?がっこ?」M「いま夏休み?」ch「なつやす

み」M「幼稚園やすみ？」ch「はいくえんやすみ」M「あ、保育園か、いつからやすみ？」ch「やちゅみ」……。『おじちゃんたっち』「おっかい」と時々言う。鉄のおもりを持たせようとしても、握力が弱くてつかめない。ボールをころがして、F「ちょうだい」と言うと「ああ……」と大声を発する。外を見ながら、F「あれは山だよ」ch「やま、やま、みる？」と言う。積木をいじりながら、ch「あっ！パーロー！」とどなる。M「こっちへおいで」と言うと、ch「おりて？」と言いながら椅子から降りる。椅子が倒れると、遊戯者が起こしても自分で倒して喜ぶ。そして、ch「いたかった？いたかった」と言う。30cm四方ぐらいの衝立ての窓からKが顔を出したり引っこめたりすると、キャーキャー言いながら喜ぶ。窓をしめると、ch「バイバイ」と言う。騒いで頭を板にぶつけると、ch「いてえ」と言う。KとMが少し相手になるのを止めると、ch「バイバイする、バイバイする？」と言ってKの顔を見ながら催促する様子。テレビマンガのテーマソングのレコードをかけると、ch「パカヤロー」を繰返して興奮する。しばらくの間静かになるが、ch「いやあ、おちっこいく」と言う。Kの膝の上に立上って窓に手をかけて外を見る。先回と同様、ch「がっこ？がっこ？」を繰返して言う。M「外へ行きたいだろう？」ch「いきたい」と言う。

衝立ての窓にかなりの関心を示した。本児には今までに見られない現象である。人を促すという対人交流も明らかに認められた。椅子を自分で倒しておいて「いたかった」と言うことも、明らかに外界の事象との交流を示すとともに、場面に対応した認知・思考過程があることを示している。時々奇声があった。

第7回 8月23日 (K, M)

自分で本を持って、ch「なに？」K「めばえだよ」ch「めばえ」と言う。例のように窓の外を見ながら、ch「がっこ？がっこ？」とよく言う。ch「あれなあに」K「サッカーやっているんだよ」ch「さっか？」K「きょうは雨こんこ降っているね」とすると、ch「あめあめふれふれ」のところの曲をハミングして2回歌う。不安傾向は全くといってよいほどみられない。自動車が下の道を通り、K「あれ何に？」ch「あれじどうしゃ？」と言う。K「さあすわろう」ch「すわる？すわる？」と言い、すぐには腰かけようとしなない。輪投げをやらせようとしても興味がなく、自分から電気スタンドのところへ行き、ch「でんき？でんきつかない？」と電気スタンドを指してスイッチをひねろうとする。おもちゃの自動車を見せて、M「これ自動車だろ？」ch「これじどうしゃ？これのる？のらない？あぶない？」その自動車を手にしながら、ch「これじどうしゃ」と言う。ch「でんき？」「あしたにちようび？」「おやすみ？」などの場面に関係のない一人言が出る。おもちゃの電話をつかんで、ch「チンなる？」M「これ何ていうの？」ch「モチモチ？」……。Mがタッピングをやると、ch「あぶない？」と言う。コップに水をくんで与えると、ch「これみず？おちっこでる」と言う。時々おもちゃを机の上から下へわざと落したり、窓から身をのり出したりする。

叫びや不安傾向はなく精制的に安定している。対人交流、対話、事象との知覚的対応などが従来よりかなり見られる。自分から問いかけるという自発的行動も見られた。窓から身をのり出したり、自らスタンドのそばへ行くという行動は注目に値する。

第8回 8月30日 (Ta, K)

窓の外を見て例の如く、ch「がっこ？がっこみえる？」と言う。抱いて高く持ち上げてやると、ch「たちけて」とか「キャーキャー」言いながら喜ぶ。ch「えかく？」K「うん書こう」と言うと、ch「やだやだ」と言う。Taが輪投げの輪を持って、Ta「一緒にやろうか」ch「おしっこでる？」M「でないよ」ch「ポンやる？」Ta「うん、ポンやろう」ch「ポンやるだ？」と言って機嫌よくやる。Kが「かくれんぼしようか？」と言って衝立ての傍へ行くと、ch「するよ」と言って衝立ての反対側へ行く。ch「おーい」K「パー」ch「パー」窓をしめると、ch「バイバイ」元気よく、ch「おやちゅみ」窓をあけると、ch「あける？」とうれしそうな声で言う。Kが「もう止め」と言っても、ch「おやちゅみ、おやちゅみする」と催促する。Kがだまっていると、ch「うんこでる」……。

不安傾向はみられず、対人交流も順調である。時々ではあるが関係のないことばを発する。衝立て遊

びでは、視覚的狀況に合ったことばを発する。

第9回 9月6日 (Ts, K, M)

15分間ほど実験室で遊んだのち近くの遊園地へ行く。実験室においては前回と同様、比較的情緒が安定していて、自発的行動がみられる。場面に対応したことばも多い。

初めての遊園地であったが不安傾向は示さない。すべり台や穴へもぐったりするが、何をするのに動作がのろい。かなり高いセメントの山にも石を伝って昇るが、足元に気をつける様子はなく、無造作に足を進めている。一つのことをした後放っておくと、自分から他の場所へ行く気配はない。新しい場面のせいか、自発性はあまりない。

第10回 9月13日 (K, M)

K「こんにちは」小さな声で、ch「こんにちは」ch「あちゃってにちようび?はいくえんおやちゅみ」実際に休みであった。輪投げを始めると、ch「やだって、うんこだって」「だだ(バイバイ)ちゅる、だだちゅる」と言いながら、衝立ての方へ行く。さらに輪を投げさせようとすると、「だだちゅる」「でんきけちゅ」「あさってにちようび?」と言う。衝立てを床の上に置くとchは腹ばいになって窓をのぞく。「あけるって」「バイバイちる」K「あけたよ」ch「バイバイ」といって跳ねる。ch「あけていいだ?」「やっていいだ?バイバイ」「ちゃよなら、ちゃよなら」……。Kが窓をしめるとchは自分で開けようとする。やがて興奮状態になり、窓をしめると窓をたたきながら、ch「あける、ちょっと、バイバイあける」あけると、ch「バイバイ、またあったね、あー」と大声で叫ぶ。豆電球をつけたり消したりする装置を与えると点滅させて遊ぶ(以前はできなかった)。「でんきけちゅ?けちてもいいだ?」「でんきつく?」と言いながらスイッチを入れたり切ったりする。電気がつくとアッハハと笑う。Kが装置にさわろうとすると手で払いのけようとする。赤と青のランプとそれらに対応するスイッチとの関係は教えてもわからない。途中、ch「でんきけつ?けってくる?」と言って席を立ち、部屋のスイッチの所へ行く。そして消してから、ch「けっていいだ?」と言う。帰るときは、ch「せんせいさようなら、あにがと、バイバイ」と言って、部屋の電気を消すように言うのと消して出て行く。

第11回 9月20日 (Ts, K, M)

遊園地へ出かける。エレベーターに乗ってもこわがらなくなった。鎖が備えてあるかなり急な崖を登るのに、鎖につかまらないう普通の歩行と同じように登ろうとする。平衡を失って倒れそうになると、ch「たちゅけてくれ、うあー、うあー」と言って叫ぶ。身体的緊張力がない。足洗い場では水道の水に興味を示すが、自分で手足を洗おうとはしない。乗用車に乗ることを好む。

第12回 10月4日 (M)

小学校5年の下の兄と一緒に実験室に入る。机の上のランプの装置を見て、ch「でんきけつ?」と言う。積み木をいじりながら、ch「あしたはにちようび?」と一人言を言い、はたらきかけても知らぬ顔をしている。兄が積み木を重ねて、「やってごらん」ch「やだ!」と強く言い、兄が積んだ積み木を倒して、ch「わはは……」と笑う。M「積み木拾って」ch「やだ、やだ!」やがて、ch「ひろえ」と言いながら積み木を拾う。輪投げをやるとき、兄「輪を投げてみ」ch「わ?わ?」と言ってでたらめに投げる。もっとやらせようとすると、ch「やだ、やだ」と強く言う。あとは人がやるのをぼんやり見ている。一人で部屋の電気のスイッチの所へ行く。Mが「どうやって消すんだ?」と聞くと、ch「けちゅ、けちてこい」といって消す。M「もう一回やろう」ch「やだ」……。M「遊園地へ行こうか?」ch「どこ?ゆうえんち?」K「すべり台」ch「どこまでちゅいていっていいだ?」M「いいよ」ch「はしってちゅいていっていいだ?」K「電気消しておいで」ch 電気を消す。

「やだ」ということが多い。自分の意志の表れがみられる。対人交流と場に応じた反応が多くみられる。不安傾向はほとんどない。かなり長い文を言うことが初めてみられた。

第13回 10月11日 (Ts, K, M)

保育園における本児の様子を観察に行く。我々が保育園の遊戯室に入ると、本児は我々のいるのに気

づきうれしそうな顔をして我々の方を見ている。園児達が並んで次々に平均台に乗ったり、でんぐり返しをするが、本児は先生が連れにくるまで我々の方を向いていることが多い。平均台はゆっくりではあるが端から端まで渡る。でんぐり返しは、先生が回転させてやらなければならない。トランポリンはかなり高くまで跳び上がり、皆と一緒にやる。

第14回 10月18日 (K, M)

今までになく元気がない。じっと椅子に腰かけたまま小さな声で、ch「おっかい」と言い、わずかな音にも「チンなった？」と言う。以前とは異なり、目の焦点が定まらず、だまっている時間が多い。ピアノでドレミファをひくと、途中から「トダチドー」と歌い、「ドレミの歌」をひくとそれに合わせて一部の曲を歌う。突然、ch「どこいく？」K「どこへ行きたい？」ch「どこがいい？いく？」と不安な様子を示す。窓から外を見せても時々「がっこ」と言うだけで、はたらきかけにもあまり応じない。K「外へ行きたいの？」ch「そとへいきたいの」と元気がない言い方をする。外ではサッカーボールで遊ぶが、ボールがchのそばへころがって行っても何もしない。Kがそばへ近づくと手を出して寄ってくる。

第15回 10月25日 (Ta, K, M)

前回と同様に小さい声で一人言を言うことが多い。ch「おっかい」「でんき」「かえる」「やだ」とこわそうな声を出す。身体をくすぐっても「やだ」と言うだけで、身体をねじる様子もない。ピアノに合わせてMが「たき火だ、たき火だ、落ち葉たき」と歌うと、ch「……ちばたき」のところだけ一緒に歌う。はたらきかけても「おっかい」「ちっこでる」などと小さい声で言うだけ。家でも最近元気がなく、風邪気味であるとのこと。

第16回 11月1日 (Ts, K, M)

第14, 15回と同様に元気がなく、はたらきかけに対してもそっぽを向いて、目の焦点は定まらない。外を見せても関心はなさそう。小さな声でぼそぼそ一人言を言うことが多い。かなり不安傾向がみられる。時々ひざを両手でばたばたとたたく。以前には関心をもった衝立て遊びにも応じない。K「粘土取って」と言うのと取って手渡す。

第17回 11月15日 (K, M, Tk)

前回よりも不安傾向は少なく元気もある。K「粘度を取って」と言っても取らない。外でサイレンが鳴ると、ch「かみなりになった？」と言う。窓の外を見ることにも興味を示さない。ピアノを自分で取って口にもって行く。K「ブーってやらないと鳴らないよ」と言うのとブーと鳴らすことができた。紅茶を飲ませるとき手でさわって、ch「あつい」と言い、小さい声で何か言いながら飲む。遊戯者のはたらきかけにはあまり応じない。ピアノで「雪やこんこ」の曲をひくと「ずんずん積る」のところの曲をロずさむ。電気スタンドの所へ自分から行って、スイッチをひねろうとすることができない。ch「でんききえちゃった、おっかい」と言って手を引っこめる。K「つけて」ch「こわい」と大声を出す。部屋を暗くすると、ch「おばけ、おばけ」と言うが不安な様子はない。部屋の明かりとスタンドの明かりを交互に点滅すると、ch「こわい」「だいじょうぶ？」「けしちゃった」など言いながらキャーキャーと騒ぐ。部屋の電気を消すことはあっても、つけることはしない。外で電話の音がすると、ch「でんわ、ゆうせん？」と言う。遊戯者二人でchをかかえて振ると喜ぶ。口笛で曲を鳴らすと、「うろう、うろう……」と調子だけ合わせて歌う。

第18回 11月29日 (Ta, K)

窓ぎわで、K「外見ようか」ch「みない」K「椅子に立ってごらん」ch「おっかない？」と言って椅子の上に立つことができない。帽子を少し離れた所に置いて、K「帽子取って」と言うのと椅子から降りて取って来る。しばらくしてから、K「粘土取って」と言っても取らない。Ta「ピチピチチャブチャブ、ランランラン」と歌うと、「じゃのめでお迎え」のところの曲をロずさむ。二人で本児を抱き上げると喜ぶが、以前のようにキャッキョウ言うことはない。豆電球のボタンを無造作に押しているが、三

つのうち一つだけランプがつくことに気づくと、その一つだけを盛んに押す。カメラの回転する音を聞くと、ch「こわくない？」と言う。全般に元気がなく、自発的行動もあまりなく、時々場面に関係のないことを言う。

第19回 1974年1月17日 (Ta, K)

遊戯者の問いかけに対して無言であったり、関係のないことを言うことがある。Ta「帽子ちょうだい」ch「がっこみえる？」……。S君と呼びかけると、ch「はいくえんいく、にちようび？」……。窓の外を見ていて、ch「がっこみにいく」Ta「じゃ行こう」ch「がっこみにいく？」と言いながら出口に向う。Ta「外へ行くの？」ch「そとへいく」Ta「行っているよ」ch「ラーメンたべてく？あける？あける？」……。と催促するように言う。屋上では端のコンクリートの上に腰かけさせてもかわがらない。下へおろすとはしゃいで跳びはねたりする。積み木が机から落ちると椅子を乗り越えたり動かしたりして自分から拾う。第14～16回頃よりかなり元気になり、自発性、対人交流なども回復してきた。不安傾向も少ない。

第20回 2月1日 (K, M)

今まで用いたものとは異なるジーと鳴る電話器の受話器をもって、K「S君もしもし」と言うと、ch「ああ、おいで、こっちか、はやく」「バイバイせんせい」などと続けざまに言う。Kの顔を見ないでうつろな目をしている。その後電話遊びをやめても、ch「ん、ん、みんなといくか、おいでって、くらないかな、こっちまでおいで」「つかまってろな、オートバイのってくよ、こんでるよ、のるかあぶないの」など、ちょうど電話で話しをする調子で、しかも今までに聞かれなかったことばを使って話す。遊戯者ののはたらきかけに応ずることはほとんどない。一人言が多い。K「はさみちょうだい」と言うと相手を見ないで渡すが、次に同じことを指示しても全く応じない。帰るとき、N「おうちへ帰る？」ch「かえる？おとうちゃん？」N「帰っているよ」ch「かえっているよ？またこい、またおいで、バイバイ」と続けざまに言う。この回は話しこそ多いが、対人交流はなく自閉的傾向が強い。幻想の世界に入っているかのような様子である。見方によっては分裂的傾向も見られる。最初の電話の場面が影響したのであろうか。

第21回 3月14日 (K)

前回とは違って一人言はほとんどない。問いかけに対してはだまっていることが多い。窓ぎわに椅子を置いて立たせようとしても立たない。ch「ああ、Sくんおっかい？」と言って外を見る。椅子ごと後方へずらすと、伸び上って外を見ようとし、ch「そとをみる？みる？」と言う。ブラインドをしめると自分で持ち上げる。机の前に腰かけても外を見たいらしく椅子の上に立ち上がる。K「スリッパをはいたまま椅子に上ってはだめだろ」というと腰かける。突然、一人で椅子からおりて戸口の方へ行こうとし、つまづいて倒れる。しばらくじっとして、Kが傍へ行くとようやく立ち上がる。しばらくすると、また椅子の上に立ち上がって窓の外を見ようとする。暗幕をしめると、ch「あける？あける？」K「自分であけてごらん」椅子からおりて窓の所へ行きカーテンを引っぱる。またKがしめると、chは戸口の方へ行き、「おしっこいく？」K「行きたくないだろう？」Kがカーテンをしめると、ch「やだ」と言って自分であけてから、ch「あけちゃった」と言う。しばらくたつと部屋の中を跳び廻る。輪投げの輪を渡すと頭へかぶせて部屋を動き廻る。この様子は普通の子どもと変りない。

上記の観察結果から本児の各行動特性をより総合的にみるために、次のような方法を採用した。

まず、第14回の保育園における観察結果を除く、20回の遊び場面においてみられた行動のうち、不安傾向、ものごとに対する関心または自発性、対人交流、対応言語（場面に応じたことば）、および反響語・一人言の各行動特性に該当すると思われるものを各回ごとに拾い出して分類した。次に各行動特性（例えば不安傾向）について、その程度がより強いと思わ

れる回の順に同順位を認めて序列づけ(20)を行なった。また、各回ごとに分類された行動特性の内容を検討して、それぞれについて絶対的評価を行なった。その際、ある行動特性がかなり強いと思われる回には評価値4を、ほとんどないと思われる回には評価値0を与え、その中間の評価に対しては、その程度に応じて評価値1, 2, 3を与えた。そして序列づけの順位と絶対的評価値の順位を照合し、両者の評価が矛盾する場合には、その分類された内容

内容をさらに検討して評価値を決定した。

ただし、この場合の絶対的評価に当たっては、それまでに筆者が本児の行動を観察してきた過程で形成された判断基準が関与していることは否定できない。図-1は回による各行動特性についての評価値の推移を示したものである。

この観察にとっての中心問題であった不安傾向は、第2回においてかなり高くなり第3回において今までにない減少を示した。そして第7回と8回においては、不安傾向はほとんど見られなくなり、第12回まで約3ヶ月間は情緒的に安定した期間であった。しかし、第13回の保育園訪問後(10月末)この不安傾向は急に増大するという現象がみられた。その後、翌年3月まで再び不安傾向は減少していった。

一方、自発性、対人交流、および対応言語は第3, 4回頃から今までになくみられるようになり、第6~8回頃

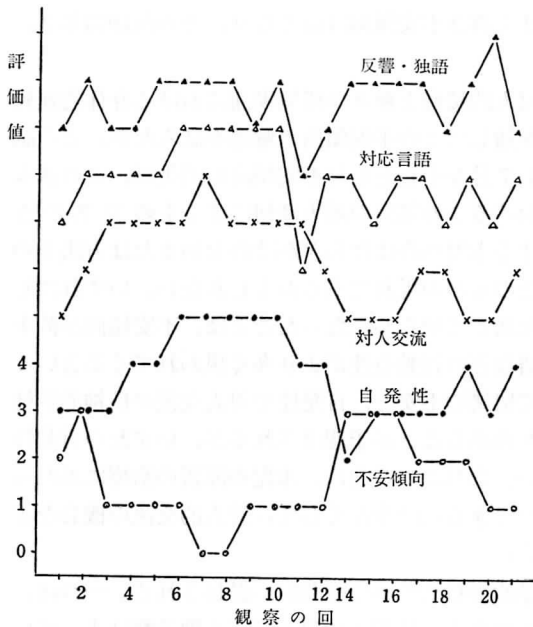


図-1 観察の回と各行動特性に対する評価値との関係。不安傾向以外の評価値は2目盛ずつ順に上に移動して示してある。

にはこの観察期間のうちで最も多く現れている。これらの行動特性が活発にみられる期間は、不安傾向の減少期間とかなり対応しており、とくに自発性と対人交流の推移は、不安傾向の推移と完全といってもよいほど裏腹の関係にある。再度不安傾向が高まった第14~16回には、やはり自発性と対人交流はかなり少なくなり、その後不安傾向が減少していくにつれて高まっていく。

反響言語・一人言にはあまり変動はみられないが、第11回においてはほとんど現れず、第20回においてはかなり多くなっている。第11回は遊園地における遊びであり、この回においては対応言語もほとんどない。第9回の遊園地における様子も同様であった。身体を動かしているとき、あるいは屋外においては発語が少ないことを示している。また第20回には、この観察期間を通じて本児の行動が最も特異性を示したときであった。電話で会話をするときのような一人言が多く、今まで聞かれなかったことばを次から次へと言う。自閉症的、あるいは分裂症的傾向として心配された。これはもう一つの特異性を示した第14回以後の急激な不安傾向の上昇となんらかの関係があるのではないかとと思われる。

考 察

本児の中心的障害と考えられた不安傾向は、相談所における第一回の観察（1972年5月）より約1年後においてはかなり減少し、さらに1973年6月末より急激な消失がみられ、7月末には全くといってよいほど現れなくなった。その後10月の初め頃までこの安定期は続いた。しかし、10月の中旬より11月初旬にかけて再び不安傾向は高くなり、その後1974年2、3月頃には減少した。

当研究室における治療的方法としては、対人的接触と種々の環境場面における身体的運動を通して、また観察結果による親への助言を通してこの不安傾向の解消を試みたが、この試みの成果はそのままには現れなかった。もし7月を中心とした不安傾向の消失が、この試みの一つの表れであるとするならば、10月におけるこの傾向の増大は何によるものであろうか。その一つは、実験室あるいは家庭における本児へのはたらきかけの欠如または方法上の誤りであり、他の一つは、本児の障害特性そのものの現れであるかもしれない。いずれにしても、相談所と当研究室における観察過程を通して明らかになったことは、不安傾向が減少するときには、自発性、対人交流、対応言語などの行動特性がより多く現われてくるということである。このことから、本児にとって情緒的不安と、自発性や対人交流の精神的特性が、精神的機能全体の中で何らかのつながりのあることが予想はされるが、いずれの行動特性が根本的役割をもつかは結論づけられない。ただこのことは、本児の障害の治療にあたっては、本児にとって好ましくない不安状況をできるだけ少なくして、対人的交流の機会をより多く与える必要のあることを示唆している。

本児の観察結果から、精神的障害の心理学的診断についての問題が提起される。一つは、障害児の行動特性は可変性をもつということである。品川（1974）が「心理診断は走っている動物を射つようなものであり……、診断対象は可変的なものである」というように、情緒的機能ばかりでなく、対人交流や言語的機能も短期間といえども不変であるということはない。本症例においても、一週間前には見せなかった症状を突然示すようなことがあり、一時間の観察帯の間にも、急に行動特性が変化してしまうようなことがしばしばみられた。ここに診断の可変性の問題が起る。

本児には全般的にみて、「対人交流がない」「外界に対する恐怖ないし不安」「ことばがない」などの Kanner 症候群(Kanner, 1943)あるいは自閉症の症状(Tinbergen & Tinbergen, 1972)が顕著にみられる。一方「ことばの理解と発語の不全」「弁別力や思考の未発達」「生活習慣の未確立」などの諸症状からみると、明らかに知的機能の遅れを表わしていて、いわゆる精神薄弱の症状を十分示している。また、小沢（1969）が「ある時点では全く幼児自閉症と思われていたものが、治療過程を経て自閉性が減じ、精薄的色彩を濃くしていく場合もある。」というように、本児の場合も、わずか一年の期間ではあるが、時間（あるいは治療）が進むにつれて自閉的傾向が減少して知能遅滞の症状が強くみられる時期と、知能遅滞が目立たないほどに自閉的傾向が強くなる時期とがみられた。普通、精神薄弱として診断されている幼児の中にも、自閉的傾向を示す場合が比較的多いと考えられる（小林, 1973）。完全に一つの疾病単位に入る障害は少ないといわれる（牧田, 1966）。結局、ある一つの精神的障害は、精神的機能を構成する個々の行動特性の障害のからみ合いの度合いと、個々の行動特性

の障害の程度によって決定されるものと考えられる。

そこで、とくに合併的障害児に対する心理学的診断において、診断者がどのような見方をすればよいかという問題が生じる。元来、心理学的診断は治療・指導のために行なうものであって、診断を行なうことによって終るものではない（小沢, 1968）。また、本症例が示すように、一つの行動特性の障害の度合いは時間の経過とともに変化し、しかも他の行動特性の変化をも伴うことがある。これらのことから、心理学的診断にとって必要なことは、一つの障害に疾病名を与えるのではなく、ある障害児が個々の行動特性をどのようなからみ合いにおいて、どの程度もっているかを、治療過程を通して具体的に検査、観察していくことであるといえよう。

本児は1974年4月より信州大学医学部附属病院において治療を受け、さらに長野県諏訪湖健康学園において教育指導を受けた。

本稿をまとめるに当っては、長野県松本児童相談所より当所における記録の提供を受け、症例の掲載の許可をいただいた。当心理学研究室の中川大倫教授よりは多くの示唆をいただいた。本児の処置を決定するに当っては、本学の小片富美子講師の医学的診断をいただいた。また、行動観察においては、当時の心理学専攻生、津崎秀樹、高田豪、近藤明彦、古市哲夫、間宮正幸、高橋誠子の諸氏に遊戯者および観察補助者として協力していただいた。なお、近藤明彦氏が本児の症状の経過についてまとめた特殊実験報告および卒業論文の観察内容を参考にした。これらに対して感謝の意を表します。

引用文献

- Kanner, L. (1943) Autistic disturbance of affective contact. *Nerv. child*, 2, 217-250.
- 小林 提樹 (1973) 自閉的精神薄弱児. 福村出版.
- 牧田 清志 (1966) 幼児自閉症とその周辺—診断基準と疾病学的位置づけについて— 児童精神医学とその近接領域, 7, 54-72.
- 小沢 勲 (1968) 幼児自閉症論の再検討 (1) —症状論について— 児童精神医学とその周辺領域, 9, 147-171.
- 小沢 勲 (1969) 幼児自閉症論の再検討 (2) —疾病論について— 児童精神医学とその周辺領域, 10, 1-31.
- Tinbergen, E. A. & Tinbergen, N. (1972) Early childhood autism. —An ethological approach— Parey.
- 品川不二郎 (1974) 心理診断の特質. 戸川行男 (編) 臨床心理学, 金子書房.